

かささぎ

通信 第108号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2021年 11月 12日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二一年十月の「森三郎の作品を読む会」では『赤い鳥』(1931.12)の「かささぎ物語」と、『かささぎ物語』(1942.8)の表題作「かささぎ物語」の読み比べをしました。

『赤い鳥』終刊後、森三郎は一九四二年四月刊行の『昔の笑ひばなし』(中央公論社)に続いて、同年八月『かささぎ物語』(帝国教育会出版部)を刊行しました。「森三郎の作品を読む会」で先月まで読んできた『昔の笑ひばなし』はコラムをまとめた体裁でした。『かささぎ物語』は『赤い鳥』掲載の童話を全面的に書き直した作品集です。刈谷市教育委員会編の『森三郎童話選集 かささぎ物語』(一九九五年)とは別の童話集です。五十年以上に森三郎自身が同じ書名で発表していた最初の童話集です。三郎は「鈴木三重吉研究人 先生と表現」(『新文明』一九五九年七月号p.35)で次のように述べています。

先生の死後数年経って、私の最初の童話集が出た時、「赤い鳥社から出したかったと思います」と言っただけだったのは鈴木「淳」氏であった。先生も、「きみの童話集の出るときには、おれが序文を書いてやる」と言はれてゐたのであった。

『かささぎ物語』には「序文」はありませんが、装幀と挿絵は石井鶴三の弟子・長野英夫です。「あとがき」で森は「私の最初の童話集を、泉下の恩師鈴木三重吉先生と、『トテ馬車』の千葉省三先生、この本の生みの親である畏友与田準一氏とに捧げます」と書いています。『トテ馬車』は千葉省三(一八九二-一九七五)が一九二九年に発表した第一童話集です。三郎は亀城尋常小学校五年生から高等科二年生の頃まで、千葉省三編集の雑誌『童話』に投稿し、童話や綴り方が入選し発表されました。雑誌には千葉の選評も載っていました。

子どもの頃から親しんでいた『童話』、そして一番大切に思っていた『赤い鳥』が今の自分を育ててくれたという思いが感じられます。出版に際しては、与田準一の力添えがあったと分かります。与田は帝国教育会出版部の企画囑託だったそうです(酒井晶代「森三郎・人と作品」前掲『森三郎童話選集』p.247)。

「かささぎ物語」は『赤い鳥』(1931.12)で何度も読んできました。私達は先ず作品を音読します。帝国教育会出版部版を読み終わると一緒に、「こちらの方が心に入りやすい」という感想が出ました。「赤い鳥」の方は声に出すとゴツンゴツンという感じがする」との声もありました。帝国教育会出版部版は修飾語を出来るだけ少なくし、説明的な表現を省いているからではないでしょうか。一文を例に挙げてみます。「『赤い鳥』(A)、帝国教育会出版部(T)」

(A) おぢいさんは、そのとき、ふと、子供のころ年上の人から聞いた、いひつたへを思ひ出しました。／(T) おぢいさんは、ふと子供の頃人から聞いた言ひつたへを思ひ出しました。

また、(A) お星さまからさぶかつた子(T) お星さまの申し子／(A) かはいさうにお思ひになり(T) あはれとお思ひになつて／(A) 白と黒とのだん／になつた(T) 白と黒とのだんだらになつた／というような言葉の選び方も話題になりました。『赤い鳥』は小さい読者にも分かる表現を選んだのだろう、しかし帝国教育会出版部版のように、分からないなりに言葉の響きから伝わるもの、残したいものがあるなどの感想で盛り上がりました。他の作品の場合にはどうなのか、読み比べを続けることにしました。

「かささぎ物語」は、小泉八雲『中国怪談集』の「織女の伝説」翻案再話作であることを本会誌『かささぎ』第三号で発表しました。

次回「森三郎の作品を読む会」

二〇二一年十二月十日(金)午後一時半~三時半 実施予定

『赤い鳥』(1932.3)「目ぐすり」と『かささぎ物語』(帝国教育会出版部)「狐の目薬」の読み比べ